

標 題 : The Seven Countries Study : 2,289 Deaths in 15 Years
7 カ国研究 : 15 年間に 2,289 人の死亡

著 者 : Ancel Keys , et al. (米国 ミネソタ大学 公衆衛生学部 生理学的衛生学科)

掲 載 誌 : Prev. Med. 13: 141-154 (1984)

要 旨 : 心臓血管系疾患の証拠がない 40-59 歳の男性 11,579 人中で、15 年間に 2,289 人が死亡し、618 人は冠状動脈性心疾患によるものであった。

7 カ国(4 地域)の 15 コホートは総死亡率が異なり、冠状動脈疾患死亡率の大きな違いを主に反映した。

開始時の特徴の間で、平均血圧だけが総死亡率におけるコホート差を説明するのに役立った。

冠状動脈疾患死亡率の分散の 4 分の 3 は、コホートの平均血清コレステロールおよび血圧の相違によって説明された。

個人別の死亡リスクを各地域で検討した。

冠状動脈疾患死亡率、年齢、血清コレステロール、血圧、および喫煙が日本を除く全ての地域で強く有意であったが、日本では冠状動脈疾患死亡が評価するのに少な過ぎた。相対的な重み付けはどこでも有意でなかった。

運動は南欧だけで有意で、そこで違いは社会経済状況と関連した。

総死亡率、年齢および血圧は全ての地域で強く有意な危険因子であったが、喫煙習慣も同様だが日本は例外であった。

相対体重はどこでも負の危険因子(予防因子)の傾向があり、南欧で有意であった。

米国および北欧の経験による冠状動脈疾患死亡率の予測は、その年齢、血清コレステロール、血圧、喫煙習慣、運動、相対体重の南欧男性で観察された死亡率を一般的に超えた。

逆に、南欧の経験によるアメリカおよび北欧の冠状動脈疾患死亡率の予測は、一般的に観察された死亡率を過少予測した。

米国と北欧との間の同様なクロス予測は総死亡率で良く、冠状動脈疾患死亡率で優れていた。

死亡率と開始時特徴との関連における時間的傾向の解析で、年齢、血圧および喫煙の継続的な重要性およびコレステロールの重要性が追跡の最近 5 年間で低下することが示された。
